

「サーヴィス」という労働は人間と 区別されるものを生産しないとい うマルクスの見解について

——「生産的労働」「不生産的労働」という概念の難点——

金 子 甫

目 次

まえがき：マルクスが「サーヴィス」と呼んだ種々の労働の区別

1. ある種の労働は人間と区別されるものを生産しないというマルクスの見解

〔1〕俳優、医者、教師などの労働はそれと区別されるものに転化することなくそのまま売られるという見解

〔2〕労働自身と区別される生産物は「物質的な物」であるという見解：「生産物労働」の定義

〔3〕「生産的労働」についての二つの定義の矛盾

〔4〕「サーヴィス」労働は一般に生産物も価値も生産することなくその「分け前」をもたらすという見解

〔5〕「サーヴィス」労働はこの労働の消費者である人間そのものを直接に生産するという見解

2. 情報を生産する労働

〔1〕俳優の労働は本を生産する労働とどう違うか？

〔2〕教師は「子供の頭に加工する」か？

〔3〕医者は「労働能力自体を保存する」か？

〔4〕どんな生産物も情報の表現形態という性格をもつ

3. 空間的存在位置を生産する労働

- 〔1〕 マルクスは運輸業が「生産過程自体」を売ると考えた
 - 〔2〕 空間上の存在位置自体が独立の生産物である
 - 〔3〕 歩くことも新しい空間的存在位置を生産する
- あとがき：労働概念の難点と労働力商品論の難点との関連について

まえがき：マルクスが「サービス」と呼んだ 種々の労働の区別

マルクスが「サービス」と呼んでいるものは、次のように全く異なる経済的立場にある人々の労働を含んでいる。

(1) 「召使」「女中」「妾」などのように、利潤を得るためにではなく生産された結果身体を消費するために雇われる人々の労働。この目的のために雇われる「料理女」「つくろい仕立屋」などの労働も、ここに含まれる。

(2) 俳優、歌手、医者、教師などの労働。

(3) 政治家、軍人、役人、宗教家などの労働。この種の労働は、純粋に経済的な現象ではないので、ここではとりあげない。

さて、俳優や医者などの労働は、召使の労働と次の点で区別される。

第一に、召使には必ず雇い主があるが、俳優や医者などには雇い主があるとはかぎらない。例えば医者は、同時に企業家でありうる。

第二に、俳優、医者、教師などが雇われているばあいでも、雇い主の経済的性格には違いがありうる。例えば、医者や教師は、おかかえ医者、家庭教師として、召使と同じように「収入」によって雇われることもあるが、むしろ、病院の医師や、学校の教師として「資本」によって雇われることの方が多い。

第三に、マルクスは、召使の労働は、ほとんど「個人的サービス」という形で行なわれると考えているが、「わづかな例外」として料理や裁縫

などのように「物質的生産物」を生産することもありうると考えている。ところが俳優、医者、教師などの労働は、「物質的生産物を生産する労働」とは完全に区別され、つねに労働自体が売られ消費されと考えられているのである。しかも、召使の「サービス」の具体的内容はほとんど述べられていないのに比べれば、俳優、医者、教師などの「サービス」の具体的内容は比較的によく述べられているといえる。

本稿では、俳優、医者、教師などの労働についてのマルクスの見解を検討することをつうじて、彼の労働概念の難点を明らかにするように試みたいと思う。このことは、召使などの労働についてのマルクスの見解の難点を明らかにすることにも役だつであろう。また、俳優、医者、教師などの労働についての見解に現われた彼の労働概念は、運輸労働についての彼の見解にも全く同じ形で現われていることを明らかにするよう試みたいと思う。

1. ある種の労働は人間と区別されるものを生産しないというマルクスの見解

〔1〕俳優、医者、教師などの労働はそれと区別されるものに転化することなくそのまま売られるという見解

マルクスは、『剰余価値学説史』と題されている手稿で、俳優、歌手、医者、教師などの労働は、労働自身と区別されるものに転化することなく、そのまま売られるという見解を明確に述べている。

「ところで、その買手または使用者自身にとって生産的である労働、たとえば演劇企業家にとっての俳優の労働について言えば、この労働は、その買手がそれを商品の形態ではなく、活動そのものの形態でのみ観客に売ることができるということによって、不生産的労働として明らかになるの

であろう。／＼このことは別として、生産的労働とは商品を生産する労働であり、不生産的労働とは個人的サービスを生産する労働である。前の労働は売ることのできる物となつてあらわれ、後の労働はその作業中に消費されなければならない。」(Karl Marx: Theorien über den Mehrwert, Dietz Verlag, Teil 1, SS. 135-136. 長谷部文雄訳『剰余価値学説史』青木書店刊(1) 239頁。以下では、『剰余価値学説史』SS. 135-136, 239頁, というように略記する。訳文の責は引用者にある。力点は原文のイタリック体を示し、斜線はそれ以下が別行になっていることを示す。以上のことは、『資本論』についても同様である。)

ここでは、「俳優の労働」の「買手」である演劇企業家は、この「労働」を「商品の形態ではなく、活動そのものの形態でのみ観客に売ることができる」と言われている。また、「個人的サービスを生産する労働」は、「商品」または「売ることのできる物となつてあらわれ」ないで、それ自体として売られ、「その作業中に消費されなければならない」と考えられている。この「個人的サービスを生産する労働」とは、多分、召使や女中の労働を指しているのであろう。

「ある種のサービス遂行、またはある種の活動または労働の使用価値、結果は、商品に体化されるのであるが、他のものは、手でつかみうる、人間自身とは区別される結果をあとに残さない。すなわち、その結果は売ることのできる商品ではない。たとえば、歌手がわたしに提供するサービスは、わたしの美的欲望をみたすのであるが、わたしが楽しむものは、その歌手自身から不可分な行動にのみ存在するのであって、歌うという彼の労働が終るや否やわたしの享楽も終るのである。わたしは、その活動そのもの、わたしの耳へのその反響を楽しむのである。」(ibid., S. 368. 593頁)

「……医者がわたしを治療するかどうか、教師がその教育に成功するかどうか、弁護士がわたしの訴訟に勝ってくれるかどうかということも、この関係の経済的規定性にとってはまったくどうでもよいことである。支払

われるものは、サービス遂行それ自体であって、その結果は、その性質上、サービス遂行者によっては保証されえないのである。サービスの一大部分は、料理女、女中などのように、商品の消費費用に属する。」(ibid., S. 369. 594頁)

ここでも、歌手の労働は、「手でつかみうる、人間自身とは区別される結果」すなわち「売ることのできる商品」という結果を「あとに残さない」と言われている。だから、買い手は「活動そのもの」を消費するということになる。同様に、医者や教師などのような「サービス遂行者」のばあいにも、「支払われるものはサービス遂行それ自体」であって、この労働の「結果」ではないと言われている。

要するに、以上にあげた二・三の文で明らかなように、マルクスは、俳優、歌手、医者、教師などの労働は、労働自身とは区別されるものに転化することなく、それ自体として売られ、消費されると考えたのである。

なお、マルクスは、労働自身が売られ消費されることが、労働が「サービス」という形をとったばあいにのみ生ずると考えたのではない。後に述べるように、彼は『資本論』第2巻のための手稿で、運輸労働について述べたときにも、「ここでは、生産過程から分離されうる生産物ではなく、生産過程自体が支払われ消費される。」(K. Marx: Das Kapital, Dietz Verlag, Bd. II, S. 49. 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫(5) 85頁。以下では『資本論』Bd. II, S. 49. (5) 85頁と略記する。)と述べている。

さて、以上のように、マルクスは、「サービス」という労働そのものが売られると考えたが、同時に、「労働自身とは区別される」ものだけが商品になりうると考えている。彼は言う。

「ところが商品の概念は、労働がその生産物に体化され、物質化され、実現されるということを含む。その直接的実在、その生きた存在における労働自身は、直接には商品として理解されえないものであって、その一時的発現が労働自身である労働能力だけが、商品として理解される。本来の

賃金労働がこのような仕方でのみ展開されうるのと同様に、『不生産的労働』もそうである……。それ故、商品[・]は労働自身とは区別される存在として理解されなければならない。だが、そうであると、商品の世界は二大範疇に分かれる。／＼一方では労働能力。／＼他方では商品自身。』(ibid., S. 134. 236-237頁)

ここでは、「労働がその生産物に体化され、物質化され」て「労働自身とは区別される」生産物に転化するばあい[・]にのみ、この生産物が商品になるのであって、「労働自身は直接には商品として理解されえない」という見解が述べられているといえよう。だから、マルクスは、演劇企業家や病院経営者などは「労働自身」を売るが「商品」を売らないと考えているのである。言いかえれば、彼は演劇企業家や病院経営者が[・]売[・]る[・]もの[・]は[・]商品[・]ではない[・]と考えているのである。同様に彼は、運輸業者が[・]売[・]る[・]もの[・]は[・]「生産過程自体」[・]であって、「対象的[・]生産物[・]ではなく商品[・]ではない」(『資本論』Bd. II, S. 50. (5) 85頁) と考えた。

さらに、ここでは、マルクスが、「労働能力」と「労働」とをはっきりと区別した上で、俳優や医者などは「労働自身」を売ると考えていることが明らかになる。彼は、俳優や医者などが[・]売[・]る[・]もの[・]は[・]「労働能力」[・]ではない[・]と考えていたからこそ、彼らが[・]売[・]る[・]もの[・]は[・]「商品」[・]ではない[・]と言っているのである。

〔2〕労働自身と区別される生産物は「物質的な物」であるという見解： 「生産的労働」の定義

以上のように、マルクスは、俳優、医者、教師などは「労働自身とは区別される」ものを生産しないと考え、それ故に彼ら（または彼らを雇う資本家）は、生産物ではなく労働そのものを売ると考えた。マルクスが、このばあい労働のほかに譲渡されるものが存在しないと考えたのは、「労働

自身と区別される存在」としての「生産物」は、「労働が……物質化され」ているものであり、「手でつかみうる」ものであると理解したからであろう。このような理解は、『資本論』第2巻の運輸業について書かれた部分にも現われている。彼はそこでも、「生産過程から分離された存在をもつ……対象」は「物質的な物」（『資本論』Bd. II, S. 49. (5) 85頁）であると理解し、「この過程とは区別される使用物」を「その生産の後にはじめて取引物品として機能し、商品として流通する使用物」(ibid., S. 50 (5) 86頁)として理解している。彼は、このような理解に基づいて、運輸業が売るのは「生産過程自体」であって「対象的生产物ではなく商品ではない」と考えたのである。（なお、運輸労働についてのマルクスの見解は、後であらためて検討する。）

こうして、マルクスは、「労働自身とは区別される」もの、または「生産過程とは区別される」ものは「物質的な物」であると考えたために、労働と呼ばれる行為を、「物質的な物」を生産するか否かを基準として、「労働自身とは区別されるもの、すなわち「商品」になりうるものを生産する労働と、「労働自身とは区別される」ものを生産しない「労働」とに分類し、前者を「生産的労働」後者を「不生産的労働」と呼んだのである。彼は言う。

「……生産的労働とは、商品を生産する、または労働能力自体を直接に生産し、形成し、発展させ、維持し、再生産する労働であろう。後者をA・スミスは、彼の生産的労働の欄から除外する。気ままに、しかし、もしそれを含めたら、生産的労働についての偽りの見せかけに門戸を開くことになるという、ある種の正しい本能をもってである。／＼だから、労働能力自体が捨象されるかぎりでは、生産的労働は、商品、すなわちその製作に一定量の労働または労働時間がかかった物質的生産物を生産する労働に帰する。これらの物質的生産物のなかには、物的にあらわれるかぎり、で、芸術および科学のあらゆる生産物、本、絵画、彫像などが含まれてい

る。」(『剰余価値学説史』S. 135. 238頁。力点は引用者による。)

つまり、「物質的生産物」を生産する労働だけが、労働→生産物→商品という転化過程を経るのであって、「サービス」という労働は、労働→労働→労働(売られるもの)という転化過程を経るだけであるというのであろう。

以上のようなマルクスの理解は、そのまま『資本論』第1巻に継承されている。彼は、その第3篇第5章第1節「労働過程」で、「単純な労働過程の立場から明らかになる」「生産的労働の規定」(『資本論』Bd. I, S. 189.

(2) 72頁の注7)として、「この全過程をその結果である生産物の立場からみれば、労働手段と労働対象との二つは生産手段として、労働自身は生産的労働として現われる」(ibid., S. 189. (2) 71頁)と述べた後に、その第5篇第14章「絶対的および相対的剰余価値」で、「前述の生産的労働の最初の規定は、物質的生産自体の性質から導きだされたものであって、全体としてみた全体労働者については、つねに真実である。」(ibid., S. 534. (3) 336頁。

力点は引用者)と言っている。これで明らかのように、マルクスは『資本論』第1巻でも「単純な労働過程」すなわち「どんな特定の社会的形態からも独立に」(ibid., S. 185 (1) 65頁)考察された「労働過程」は、「物質的生産」の過程であると考えている。そして、彼は、「物質的生産」の結果だけを「生産物」と呼び、「物質的」なものを生産する労働だけを「労働」と呼んでいるのである。このことは、彼が、本来の「生産物」は「物質的」なものであり、本来の「労働」は「物質的」なものに転化すると考えていることを意味すると言えよう。だから、特殊な労働を「生産的労働」として定義することに代って、「労働自身」の性格によって必然的に「労働自身は生産的労働として現われる」という見解が生じた。

さらに、この「物質的生産」というマルクスの概念自体も、『剰余価値学説史』を書いたときから『資本論』を書いたときにかけて変るはずはないであろう。彼は同じ第14章で、すぐつづいて、次のように言っている。

「しかし、他面では生産的労働の概念が狭められる。……ただ資本家のために剰余価値を生産する労働者、すなわち資本の自己増殖に役だつ労働者だけが、生産的である。物質的生産の圏外から一例をあげることが許されるならば、学校教師というものは、子供の頭に加工するだけではなく、企業家を富ませるために自分自身を働き疲れさせるならば、生産的労働者である。」(ibid., S. 534. (3) 336頁)

ここでも、学校教師は「物質的生産の圏外」にあるものとされているから、学校教師は「単純な労働過程の立場」からみれば「生産的労働者」ではないということになる。すなわち、学校教師は、「子供の頭に加工する」だけならば「生産的労働者」ではなく、「企業家を富ませるために自分自身を働き疲れさせる」という意味でのみ「生産的労働者」であると考えられている。全く同じように『剰余価値学説史』でも、「教師は、生徒にたいしては生産的労働者ではないとはいえ、彼の企業家にたいしては生産的労働者である。」(『剰余価値学説史』S. 374. 601頁)と言われたのであった。

なお、『資本論』のドイツ語版 (Das Kapital) よりも後に出版されたそのフランス語版 (Le Capital) の標題の下には、「著者により全面的に改訂された」と書かれているが、このフランス語版でも、教師は「物質的生産の圏外」にあると書かれていないとはいえ、「学校教師は、彼の生徒の精神を形づくるから生産的労働者なのではなく、自分の雇主に 100 スーの金をもたらすから生産的労働者なのである。」(K. Marx: Le Capital, Livre Premier, Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur, Éditeurs, Maurice Lachâtre. 極東書店リプリント版, p. 219.) と述べられている。だから、学校教師は、それ自体としては「不生産的労働者」である（すなわち「物質的生産」にたずさわらない）という見解は、フランス語版でも変っていないのである。^(注)

(注) 船木勝也氏は、『資本論』のドイツ語版とそのフランス語版とのあいだには、

「生産的労働」についての叙述に重大な違いがあると言われている（船木勝也「国民所得論における『生産的労働』についての一覚書——Le Capital と Das Kapital およびサービス労働とについて——」『東北学院大学論集』第49・50合併号，1966年12月）。しかし，歌が「生産物」であるという見解には賛成できても，マルクスがそのように考えたという解釈には賛成できない。また，歌が「生産物」であるということは，歌が「物質的生産物」であるということとは違うであろうし，とくに，マルクスが歌をバナナと同じように「物質的生産物」であると考えたという解釈には，非常な無理があるように思える。その根拠はすでに述べたとおりであるが，さらに〔5〕で述べるように，このフランス語版で，「学校教師は彼の生徒の精神を形成する」と述べられていることは，学校教師の労働の直接的結果が，「物質的生産物」ではなく人間そのものであると考えられていることを，はっきりと示しているように思える。

〔3〕 「生産的労働」についての二つの定義の矛盾

マルクスは，アダム・スミスに従って，「生産的労働」について二つの異なる定義を述べた。すなわち，マルクスは，「生産的労働は，商品，すなわち……物質的生産物を生産する労働に帰する。」（〔2〕に引用）と述べる前に，これとは対立する定義を述べている。

「生産的労働は，ここでは資本主義的生産の立場から規定されるのであり，A・スミスは事柄自体を概念的にきわめつくし，急所をついている。彼の最大の科学的功績の一つは……彼が生産的労働を，直接に資本と交換される労働として規定していることであり，すなわち，労働の生産諸条件と価値一般，貨幣または商品が，それによってはじめて資本に（また労働が科学的な意味での賃金労働に）転化するような交換によって規定していることである。／＼これによって，何が不生産的労働であるかということもまた，絶対的に確定される。それは，資本にたいしてではなく，直接に収入にたいして，したがって賃金または利潤にたいして……交換される労働である。……したがって，これらの規定は，労働の質料的規定から（労働の生産物の性質からも具体的な労働としての労働の規定性からも）ひき

だされたのではなく、そこで労働が実現される特定の社会的形態、社会的生産諸関係からひきだされたのである。したがって、たとえば俳優は、道化役者でさえも、資本家(企業家)に雇われて労働し、彼から賃金の形態で受けとるよりも多くの労働を返すならば生産的労働者であるが、資本家の家にはいって彼のズボンをつくろう、すなわち単なる使用価値を創造するつくろい仕立屋は、不生産的労働者である。前者の労働は資本にたいして交換され、後者の労働は収入にたいして交換される。前者の労働は剰余価値を創造する。後者の労働には収入が消費される。』(『剰余価値学説史』S.120 216—217頁)

「……資本が生産全体を征服したものと前提すれば……したがって、もはや資本家だけが諸商品の生産者だ(唯一の商品すなわち労働能力を除いて)と前提すれば、収入は、資本だけが生産して売る諸商品と交換されるか、それとも、その諸商品と同じように消費されるために買われる諸労働と交換されなければならない……。これらのサービスの生産者にとっては、これらのサービス遂行が商品である。」(ibid., S. 121. 218頁)

このように、マルクスは、アダム・スミスが「生産的労働を、直接に資本と交換される労働として規定していること」を肯定し、「これによって何が不生産的労働であるかということもまた、絶対的に確定される。それは資本にたいしてではなく、直接に収入にたいして……交換される労働である。」と言っている。そして、彼はこの定義によって、「たとえば俳優は……資本家……に雇われて労働し、彼から賃金の形態で受けとるよりも多くの労働を返すならば生産的労働者であるが、資本家の家にはいって彼のズボンをつくろう……つくろい仕立屋は不生産的労働者である。」と言っている。すなわち、ここでは、資本家に雇われる俳優ではなく、「つくろい仕立屋」「召使」(ibid., S. 122. 219頁)などが、彼らの「サービス遂行」を「収入」と交換し、それ故に「不生産的労働者」であると言われている。

ところが、マルクスは、この後の別のところでは、演劇企業家が「俳優の労働」を買うと共にそれを観客に売るという見解を述べたことは、すでにみたとおりである。すなわち、マルクスは、「この労働は、その買手がそれを商品の形態ではなく、活動そのものの形態でのみ観客に売ることができるということによって、不生産的労働として明らかになるのであろう。」

(〔1〕に引用)と述べ、また、歌手、医者、教師などの労働について、「支払われるものは、サービス遂行それ自体である」(同上)と述べている。このようにマルクスは、俳優や医者などが資本家に雇われるにせよ雇われないにせよ、彼らの労働は、「サービス」という形で、それ自体として売られると考えた。したがって、俳優の労働を観客に売る者が俳優自身であるか、彼を雇う企業家であるかをとわず、俳優の労働は「直接に収入と交換される」ことになるであろう。マルクス自身が次のように言っている。

「劇場、音楽会、女郎屋などの企業家は、俳優、楽師、売春婦などの労働能力の一時的な処理を買う……。すなわち、彼はそのサービスがその『遂行の瞬間に消えうせ』て『持久的な』(また、肝要なことだが、特殊な)『対象または売ることのできる商品』(彼ら自身以外の)に固定されまたは実現されないような、このいわゆる『不生産的労働』を買うのである。公衆へのこの販売は、彼に賃金と利潤とを償還する。そして、彼がそうして買ったこのサービスは、彼がそれを再び買う能力を与える。すなわちこのサービス自身によって、このサービスに支払う基金が更新されるのである。……／＼企業家自身にこれらのサービスが公衆の収入から支払われるということは真実である。」(ibid., S. 129. 229—230頁。力点は引用者)

ここでは、「劇場、音楽会、女郎屋などの企業家」が、俳優、楽師、売春婦などから彼らの「不生産的労働」または「サービス」を「買う」だけでなく、「公衆へのこの販売」をするという見解が明確に述べられると共に、「企業家自身にこれらのサービスが公衆の収入から支払われ

る」と述べられているのである。だから、俳優の労働は、「生産的労働は……物質的生産物を生産する労働に帰する」という定義によって「不生産的労働」となるだけでなく、「不生産的労働」は「直接に収入にたいして……交換される労働である」という定義によっても「不生産的労働」ということになるはずである^(注)。

(注) なお、『労働能力の一時的な処理』とは労働自体であると考えられていることは、別の所で「労働能力」の「一時的発現は労働自身である」(C1)に引用とされていることを見ても明らかであろう。

こうして、マルクス自身が、演劇企業家は俳優から彼の「労働」または「サービス」を買って、それを公衆に売ると言っているのだから、「俳優の労働」は「直接に資本と交換される」と共に「直接に収入と交換される」ことになる。したがって、同一の定義によって、俳優の労働は、「生産的労働」であると共に「不生産的労働」であるということになる。言い換えれば、俳優の労働は「生産的労働」であると共に「生産的労働」ではないということになる。これは、矛盾律の侵害であろう。

さらに、マルクスは、スミスに従って、「生産的労働」を、ここでは「直接に資本と交換される労働」として定義し、前に引用した所では「商品をすなわち……物質的生産物を生産する労働」として定義した。そして、彼は、ここでは「これらの規定は、労働の質料的規定から（労働の生産物の性質からも具体的な労働としての労働の規定性からも）ひきだされたのではな」と言い、別の所では、「生産的労働」の「規定」を、「労働の質料的規定から」（「物質的生産物」であるという「労働の生産物の性質から」、また「物質的」なものに転化することなくそれ自体として売られ消費されるという具体的な労働としての質料的規定性から）ひきだしている。だから、マルクスの一つの定義自体の中に論理的矛盾があるだけでなく、二つの定義どうしも矛盾している。その結果、マルクスは、俳優の労働が、

彼を雇う資本家にとっては「生産的」であるが、この労働自身の性質からすれば「不生産的」であると述べることになる。つまり、俳優の労働は、彼の一つの定義によって「生産的」であると共に彼の他の定義によって「生産的」でないということになった。

マルクスは、このような論理の矛盾をどのようにして解消しようとしたか？ 彼は、まず、このように「直接に資本と交換される労働」が「商品すなわち……物質的生産物を生産する労働」ではないというようなことは「生産全体と比較すればまったく無視していいほどわずかである」という事実認識を語ることによって、論理の矛盾を解消しようとする。彼は言う。

「観客にたいしてはこのばあい俳優は芸術家としてふるまうが、彼の企業家にたいしては彼は生産的労働者である。この分野での資本主義的生産のすべてのこれらの現象は、生産全体と比較すればまったく無視していいほどにわずかである。」(ibid., S. 374. 601頁。力点は引用者)

「資本が全生産を征服するのと同じ程度に……ますます、生産的労働と不生産的労働とのあいだの質料的区別が生ずるであろうことは明らかである。なぜならば、前者は、わずかな例外をのぞけば、もっぱら商品を生産し、後者は、わずかな例外をのぞき、個人的なサービス遂行だけを行うであろうからである。」(ibid. SS. 123-124. 221頁)

このように、マルクスは、「直接に資本と交換される労働」が「サービス」を生産することも、また、「直接に収入と交換される労働」が「物質的生産物」を生産することも、どちらも「わずかな例外」であるという見解を述べている(さらに, ibid., S. 122. 219-220頁, SS. 127-128. 227頁を参照)。そして、この「例外」をまったく無視することによって、次のように「生産的労働」についての異なる定義を一致させようとしているのである。彼は言う。

「……資本主義的生産の本質的關係の考察にさいしては、……全商品世

界、物質的生産——物質的富の生産——のすべての領域が、資本主義的生産様式に（形式的にまたは現実的に）征服されているとみなされうる。……そこで、生産的労働者、すなわち資本を生産する労働者の特徴として、彼らの労働は、商品、物質的富に実現されるということが指摘される。そうすると、生産的労働は、労働の内容にたいして無関係でそれから独立の生産的労働の決定的特徴とは区別される第二の副次的規定を受けとることになるであろう。」(ibid., S. 373. 600頁)

ここでは、「資本を生産する」労働は、「商品、物質的に実現される」労働と完全に一致するものとみなされている。つまり、「生産的労働」が「不生産的労働」と一致するという論理的矛盾は消えているが、それは、この矛盾を全く無視することによってであることは、すでに見たとおりである。

さらに、ここでは、「資本を生産する」ということが「生産的労働の決定的特徴」とされ、「商品、物質的富に実現される」ということは、「第二の副次規定」とされている。しかし、「副次」であるということは、必要がないという意味ならば、どうして、このような「規定」を述べて、論理的矛盾をつくりださなければならなかったのか？ または、この「規定」は「副次」であってもやはり必要であるならば、どのように必要であるのか？ 要するに、二つの規定に順位をつけることは、問題を一そう不明瞭にただけである。

しかも、「物質的生産物を生産する労働」が「生産的労働」であるという規定は、『剰余価値学説史』自体の中でも『資本論』でも、「労働」「生産」「生産物」などの概念についてのマルクスの規定と不可分であることは、これまででも明らかであろう。だから、この規定は廃棄されることなく、「単純な労働過程」の立場に基づく「生産的労働の規定」という形で『資本論』にとりこまれた。そして、「物質的生産物を生産する労働」だけが「価値」および「剰余価値を創造する」が、そうではない労働は、

資本家のために「剰余価値の分け前を創造する」という見解が、商業労働についての見解という形で形成されたものとみることができよう。そして、このことは、次にみるように、「不生産的労働」の属性として、同じ『剰余価値学説史』の中ですでに述べられているのである。

〔4〕 「サービス」労働は一般に生産物も価値も生産することなく その「分け前」をもたらすという見解

マルクスは、「サービス」を行う労働者が「資本」によって雇われたものであれ「収入」によって雇われたものであれ、また誰にも雇われていないで独立しているものであれ、何れにしても、「サービス」は、この労働と区別される生産物にも商品にも転化することなく「直接に収入と交換される」ものとして述べていることは、すでに明らかなおりでである。ところで、生産物でも商品でもないものが「収入と交換される」としたら、それは、生産物とおしての交換でも、価値をもつものとおしの交換でもなく、生産物または価値の一方的な移転であるということになるであろう。したがって、マルクスは、どのような種類の「サービス」を遂行する労働者についても、この労働者は、「サービス」と「収入」との交換をつうじて「収入の分け前」を受けとり、したがって他の「生産的労働者」が生産した生産物または商品の分け前を受けとるものとして述べている。

「これらのものは、一定の使用価値（空想的または現実的）および一定の交換価値をもっている。だが買手にとってはこれらのサービスは、彼の収入を消費する単なる使用価値、対象である。これらの不生産的労働者は、収入（賃金と利潤）の分け前、生産的労働によって生産された商品への参与を無償で受けとるのではない。彼らはそれを買わなければならない。しかし彼らはその生産とは何の関係もない。」（『剰余価値学説史』S. 121, 218頁。力点は引用者）

これは、マルクスが、「不生産労働」は「資本にたいしてではなく直接に収入にたいして交換される……労働である」という定義を述べたすぐ後で述べたものである。だから、これは、直接には召使について述べたものであるといえよう。しかし、マルクスは、次のように、全く同じことを他の種の「サービス」についても述べている。

「……どんな事情があっても、医者や教師のサービスは生産の空費に属する。これは労働能力の修繕費に数えることができる。……医者や学校教師の労働は、一般にすべての価値を創造する基金の生産費、すなわち労働能力の生産費にはいるとはいえ、直接には、彼らが支払われる基金を創造しない、ということは明らかである。」(ibid., 130. 231頁)

「市場にはいつでも、小麦や肉などと共に、売春婦、弁護士、聖職者、音楽会、演劇、兵士、政治家などが存在しないか？ これらの連中は、『穀物その他の生活手段』または『楽しみ』を無償では受けとらない。彼らは、その代りに彼らのサービスを与え、または押しつける。そしてそれは、このようなサービスとして使用価値をもち、またその生産費の結果として交換価値をもっている。……同じ価値が二重に存在する。一度は買手の側に一度は売手の側に。」(ibid., SS. 131-132. 232-233頁)

このように、医者や学校教師は「直接には、彼らが支払われる基金を創造しない」と言われているが、これは、前に、「直接に収入にたいして……交換される労働」を行う労働者について、「収入……の分け前、生産的労働によって生産された商品への参与を無償で受けとるのではない。……しかし彼らはその生産とは何の関係もない。」と言われていることと同じであろう。また、「売春婦、弁護士、聖職者、音楽会、演劇」などの連中が、『穀物その他の生活物』を無償では受けとらない。彼らはその代りに彼らのサービスを与えまたは押しつける」と言われていることもやはり前に言われていることと同じであろう。したがって、何れのばあいにも、価値をもつものどうしが交換されるのではなく、「同じ価値」が「一度は買手の

側に、一度は売手の側に」存在するということになるであろう。

「工業労働および農業労働の生産性だけが、生産的労働者たちによって創造されても彼らに支払われない剰余だけが、一般に不生産的労働者に支払われる基金を供給するということを、ガニール氏は忘れている。……召使や妾の価値、すなわち彼らの生産費は、生産的労働者の純生産物に完全に依存する。彼らの価格と彼らの価値には、たがいに共通するものがほとんどない。」(ibid., S. 174. 298頁。力点は引用者)

ここでは「召使や妾」の「生産費」すなわち彼らの生存自体が「生産的労働者の純生産物に完全に依存する」と言われているが、同時に、「工業労働および農業労働の生産性だけが……一般に不生産的労働者に支払われる基金を供給する」という見解が述べられていることに注目すべきであろう。つまり、「工業労働および農業労働」だけが「生産的労働」であって、この種の労働をする「生産的労働者」だけが、その他の種類の労働者に支払われる価値を創造するという見解が述べられているのである。なお『剰余価値学説史』では、ある種の賃金労働者は新しい価値を生産しないという見解が、ある種の賃金労働者は「彼らに支払われる基金を創造しない」という形で述べられていることを記憶すべきであろう。

以上のように、マルクスは、召使や妾なども、俳優、医者、教師なども、すべて、彼らの労働と区別される生産物も、商品も、したがって価値一般をも生産することなく、他の労働者が生産した生産物または価値の「分け前」を得るものと考えている。このように、「サービス」を行う労働者が一般に生産物も価値も生産しないと述べられたことは、『資本論』で商業労働者が「価値も生産物も創造しない」(『資本論』Bd. II, S. 126. (5) 202頁)と述べられているのと同じである。

さらに、「不生産的労働者」は、他の人々の「収入(賃金および利潤)の分け前」を得るのであり、「生産的労働者によって創造されるが彼らに支払われない剰余だけが、一般に不生産的労働者に支払われる基金を供給す

る」のであるとしたら、「不生産的労働者」を雇った資本家が利潤として取得する価値部分も、彼自身が雇った「不生産的労働者」によって生産されたのではなく、「生産的労働者によって創造されるが彼らに支払われない剰余」によって供給されるものであろう。そして、このことは、『資本論』で、商業資本の「剰余価値」について次のように言われていることと同じであろう。

「これらの店員の不払労働は、剰余価値を創造しないとはいえ、商業資本家のために剰余価値の取得を創造する……。」(『資本論』 Bd. III, S. 325. (9) 140頁)

「労働者の不払労働が生産的資本のために直接に剰余価値を創造するように、商業的賃金労働者の不払労働は商業資本のために剰余価値の分け前を創造する。」(ibid., 同上頁。力点は引用者)

だから、それ自体としては「不生産的」であると言われている俳優の労働が、「その買手または使用者自身にとって」すなわち演劇企業家にとって「生産的である」と言われたのは、「商業資本が買う商業労働も、商業資本にとっては直接に生産的である。」(ibid., S. 333. (9) 153頁。力点は引用者)と言われたのと同じであろう。

こうして、俳優の労働がそれ自体としては「不生産的」であるが「その買手または使用者自身にとっては生産的である」という矛盾は、俳優の労働が価値および「剰余価値」を生産しないにもかかわらず彼を雇う資本家のために「剰余価値の分け前を創造する」という命題の形で解決されざるをえなかったといえよう。

しかし、「サービス」労働は、それ自体として売られ消費されると考えられ、したがって、次節で述べるように「労働能力の生産費にはいる」と考えられていることは、商業労働とは異なる。マルクスは、商業労働が「不生産的」であるのは、それが「一形態から他の形態への価値の転化をつくりだすために」(ibid., Bd. II, S. 124. (5) 199頁) 支出されるからである

と考えている。したがって、商業労働が「不生産的」であるかどうかという問題は、別稿で検討したい。

ただし、マルクスの見解からすれば、いわゆる「サービス」を売る資本家は、一種の商業資本家であるという結論が生じうるのである。何故ならば、すでに見たように、マルクスは、いわゆるサービス業をいとなむ資本家が、賃金労働者から「サービス」という労働を買ってそれを客に売ると考えているからである。サービス資本家が狭義の商業資本家と違うのは、商業資本家は商品を買って売るのがたいして、サービス資本家は「労働」を、すなわち商品ではないものを買って売るという点にあるということになる。

なお、『資本論』では、賃金労働者が資本家に売るのは、労働であるという見解にかわって、それは労働ではなく労働力であるという見解が述べられている。しかし、『資本論』では、賃金労働者が売るのは「労働」ではないが、彼が現実に譲渡するものは「労働」であるという見解が述べられ、新しい矛盾が生じている。しかし、このような、賃金労働者が資本家に売るものについてのマルクスの見解の変化、およびこれらの見解に含まれる論理的矛盾について検討することは、別稿にゆずらざるをえない。

〔5〕 「サービス」労働はこの労働の消費者である人間そのものを直接に生産するという見解

俳優や医者などの労働は、この労働自身以外に売られ消費されるものを生産しないとしたら、この労働を買う人はこの労働そのものを消費するのであり、その結果、この労働は直接に人間に転化することになる。すなわち、俳優、医者、教師など（または彼らを雇う資本家）は「サービス」という労働そのものを売るという見解は、この「サービス」という労働が「人間自身とは区別される」ものに転化することなく直接に人間

を生産するという見解をもたらすのである。このことは、マルクスが、医者は「健康を維持し……労働能力自体を保存する」(『剰余価値学説史』S.130. 231頁)と言ったり、「学校教師は子供の頭に加工する」(『資本論』ドイツ語版,〔2〕に引用)と言ったりしていることに示されている。つまり、医者は他の人間そのものを保存し、教師は他人の頭を生産すると考えられているのである。『資本論』フランス語版では、「学校教師は彼の生徒の精神を形づくる」(〔2〕に引用)とさえ述べられている。

また教師や医者などが直接に人間を生産し、または再生産するという見解は、教師や医者などが「労働能力を形成し、維持し、変化させる」(『剰余価値学説史』S. 135. 231頁)「労働能力自体を直接に生産し、形成し、発展させ、維持し、再生産する」(〔2〕に引用)という見解の形でも現われる。そして、マルクスは、医者や教師などが、直接に人間そのものを生産するだけで、人間と区別されるものを生産しないという見解を、「医者や学校教師の労働は、……労働能力の生産費にはいるとはいえ、直接には、彼らが支払われる基金を創造しない」(〔4〕に引用)という形で述べたのであった。だからこそ、マルクスは、教師や医者の労働を「不生産的労働」と規定したのであり、また、アダム・スミスが「労働能力自体を直接に生産し……再生産する労働」を「彼の生産的労働の欄から除外」(〔2〕に引用)したことを肯定しているのであろう。

このように、マルクスは、医者や教師などの労働を、人間とは区別されるものを生産することなく、直接に人間そのものを生産する労働として理解したのであるが、他方、「料理女、女中など」の労働を「商品の消費費用に属する」(ibid., S. 369. 594頁.〔1〕に引用)もの、「物を消費するために絶対に必要でいわば消費費用に属する部分」(ibid., S. 147. 256頁)と理解した。すなわち、マルクスは、召使や女中などの労働が、「物を消費するためにのみ」必要で、「全く生産ではないもの」(ibid., S. 175. 300頁)と考えた。そして、彼は、別のところで、他の物の生産と同一ではない、たんなる物

の消費という彼の概念を「個人的消費」と呼び、「個人的消費の生産物は消費者自身であるが、生産的消費の結果は消費者とは区別される生産物である。」(『資本論』Bd. I, S. 192. (2) 75頁) と言ったのである。したがって、「物を消費するために」必要な召使や女中などの労働は、「消費者自身」すなわち人間自身を直接に生産すると理解されていたことは明らかであろう。

マルクスは、このように、人間とは区別される物を生産する労働と人間を生産する労働との区別、または、物を生産する労働と物を消費する労働(＝人間を生産する労働)との区別が、人間の具体的な行為の区分という形で現われるものと考え、前者を「生産的労働」後者を「不生産的労働」と呼んだのである。言い換えれば、彼は、「本来の生産」と「本来の消費」(マルクスが『経済学批判序説』で用いている言葉)との区別が具体的な行為の区別という形で存在すると考えているのである。続稿では、このような見解を一般的に批判するつもりであるが、そのためには、まず、俳優、医者、教師などが「労働自身と区別される」しかも「人間自身と区別される」ものを生産すること、そして、この生産物が商品になることを明らかにしなければならない。「料理、家を清潔にしておくこと」などが「消費費用」(『剰余価値学説史』S. 173. 297頁) という範疇に属するという見解については、続稿で批判したい。

マルクスによって「サービス」と呼ばれる労働がそれ自体として「生産的」であるという見解を、マルクスの見解として論証することが不可能であることは、もはや明らかであろう。「サービス」労働が生産的であることを明らかにするためには、「サービス」という労働自体が売られ、消費されるというマルクスの見解、また、「サービス」という労働はそれを消費する人間自身を生産するという彼の見解を批判しなければならないのである。

しかし、「サービス」という労働がそれ自体として売られるという見

解自体の中に含まれる矛盾を明らかにすることは、賃金労働者が資本家にたいして労働を売る（または「譲渡する」）という見解に含まれる矛盾を明らかにすることと共に、別稿で試みたい。さしあたりは、俳優や医者（または彼らを雇う企業家が）彼らの労働とは区別される生産物を売ることを明らかにするようにつとめたいのである。

2. 情報を生産する労働

すでに明らかなように、マルクスが、俳優、医者、教師などの労働は、この労働自身と区別されるものに転化することなく、そのまま売られると考えたのは、「労働自身と区別される存在」は「物質的」なものであると理解したからであろう。このような理解には、その母胎である「古典派経済学」が形成された「産業資本」の時代の精神が表現されているが、それ以上の合理的根拠を見いだすことはできない。これから述べる情報や空間的存在位置は、「手でつかみうる」ものではなく「物質的」なものでもないが、「労働自身と区別される」しかも「人間自身と区別される」生産物である。そして、俳優、医者、教師などは、さまざまな形態の情報を生産し、この生産物が商品として売られるのである。

〔1〕 俳優の労働は本を生産する労働とどう違うか？

マルクスは、「生産的労働は、商品、すなわち……物質的生産物を生産する労働に帰する」と述べた後で、「これらの物質的生産物のなかには、物的にあらわれるかぎり、芸術および科学のあらゆる生産物、本、絵画、彫像などが含まれている。」（1の〔2〕に引用）とつけ加えている。また、別のところでは、「生産的労働者」の「生産物」が「不生産的労働者のために生産手段として役だつ」という見解を、次のように述べている。

「……奇妙にみえるかもしれないが、丸薬を処方する医者とは生産的労働者ではないが、丸薬をまるめる薬剤師は生産的労働者である。それと同様に、ヴァイオリンをひく楽師はそうではない。このことは、『生産的労働者』が、不生産的労働者のために生産手段として役だつ以外に何の目的ももたない生産物を供給するということを証明するにすぎないであろう。」

(『剰余価値学説史』S. 148. 258頁)

このように、マルクスは、本や彫像を生産する労働は「物的にあらわれる」が故に「生産的労働」であるが、劇や音楽を生産する労働はそうではないと考え、また、劇や音楽を生産する労働のうち、その生産手段として役だっている衣裳や楽器などの「物質的生産物」を生産する労働という部分だけを「生産的労働」としてみとめた。以上のことは、彼が本や彫像を生産するために必要な全労働を「生産的労働」と理解しているのではなく、そのうちの「物的にあらわれる」労働部分だけを「生産的労働」としてとらえていることを意味するであろう。したがって、本に投じられる「生産的労働」は製紙労働や印刷労働などに還元され、彫像に投じられる「生産的労働」は石材または木材を生産する労働に還元されていることになる。

しかし、本という形で供給されるものの決定的要素、買手が第一に期待する部分は、紙やその形態などではなく、文字として記された情報である(それがどのような性質の情報であるかは、さしあたりどうでもよい)。また、彫像という形で供給されるものの決定的要素も、石材や木材ではなく、それに刻まれた芸術的情報である。そして、これらの情報は、ある種の活動の結果としてのみ生ずるものであり、労働の生産物である。したがって、本の質を規定する労働は、「物質的」なものを生産する労働、例えば製紙労働や印刷労働などではなく、情報という「物質的」ではないものを生産する労働であり、彫像の質を規定する労働も、石材を生産する労働ではなく、情報を生産する労働である。マルクスが、芸術的活動および学問的活動の

うち、「物的にあらわれる」部分だけを「生産的労働」としてとらえたということは、彼が、芸術的作品および学問的成果の実体である情報を「生産物」としてはとらえず、これらの情報を生産する労働を「生産的労働」としてとらえなかったことをよく示している。したがって、マルクスが、本や彫像を生産する労働を「生産的労働」と理解したのは、俳優の労働を「不生産的労働」と理解したのと全く同じ誤った根拠に基づいていると言わなければならない。

さて、演劇企業家が劇という形で提供するものも、俳優などの労働によって生産された情報である。俳優は、一定の空間と時間の中で、観客によって了解されている一定の規則に従った音声、顔の表情、身振り手振りなどの組み合わせによって、すでに文字の形態を与えられている芸術的情報(戯曲)を、生きている人々の現実的行為という形で表現する。俳優は、他人によって文字の形態で生産されている情報に加工して、彼自身の情報を生産し、この情報の内容を一定の規則に従った彼自身の行為という形態で表現する。だから、劇の質は、文字の形態で生産された情報(戯曲)の質と、それを加工する俳優の技術とによって規定されるのである。同様に、音楽の質は、作曲の質と演奏技術との両方によって規定される。

劇の観客は、俳優の行為そのものを消費するのではなく、彼の行為によって表現された情報を消費する。この情報を消費した結果は、何らかの感動という形で現われた情報である。劇や音楽は、それを生産する労働と同時に存在するから、買い手によるその消費もこれらの生産とほぼ同時に行なわれる(「ほぼ同時に」というのは、劇が観客に伝達されるために、光速と音速とによって規定される時間が必要だからである)。しかし、このことは、俳優の労働が「労働自身とは区別される」ものを生産しなかったこと、したがって、労働自身のほかには、支払われ消費されるものが実在しないことを意味するのではない。生産と消費とが同時に行われるということは、情報という生産物の表現と伝達とを媒介する特殊な素材の性質によ

って規定されているにすぎない。劇場の観客は、食物を消費するのとは別の仕方で、労働の生産物である情報を消費する。劇を観て生じた何らかの感動は、たしかに情報が消費されたことを示している。なお、生産物が生産過程と同時に存在し、生産物の消費がその生産とほぼ同時に行なわれることは、電力の生産と消費についても言えることであるが、電力の「生産過程そのもの」が支払われ消費されるわけではないのである。

以上のように、劇や音楽は、本、絵画、彫像などと同じ種類の生産物である。紙に印刷された文字、人間の音声の変化である言葉、身振り手振り、木材や石材の形態などの違いは、さまざまな性質の情報という生産物を表現し、伝達するための手段の違いであるにすぎない。

〔2〕 教師は「子供の頭に加工する」か？

すでに述べたように、マルクスが、「学校教師は子供の頭に加工する」（『資本論』ドイツ語版、第1巻第5篇第14章）「学校教師は生徒の精神を形づくる」（『資本論』フランス語版、第1巻第5篇第16章）と言ったことは、学校教師が人間と区別されるものを生産しないというマルクスの見解をよく示している（1の〔5〕を参照して頂きたい）。

しかし、教師の授業は、彼の生産した情報を生徒にたいして伝達することである。^{（注）}教師の労働は、まず、彼が選択した一定の情報に加工して、生徒が消費しやすいような形態の情報を生産することとしてとらえることができる。それは、米の飯を、赤ん坊や病人のために、おかゆにすることに似ている。次に、教師の労働は、彼が生産した情報に話すという形態や文字の形態などを与えることとしてとらえることができる。ただし、情報内容を生産することと、それに話す、書くという諸形態を与えることとは、継起的にも同時的にも行なわれうる。

(注) 坂本賢三氏は、「教育労働」を「情報を伝達する労働」の一つとしてあげている(坂本賢三著『技術論序説』上巻, 合同出版, 18頁)。

人が話すということ一般が、ある情報を生産し、この情報に音声の記号形態を与えることである。もちろん、それと同時に、顔の表情、身振り手振りなどの表現形態を与えることでもある。彼の供給する情報が、他人の生産した情報を材料としているということは、彼の供給する情報が彼自身の生産物であることを否定することにはならない。それは、彫像が彫刻家以外の人の生産した木材や石材を材料としていることは、この彫像が彫刻家の生産物であることを否定することにならないのと同じである。もともと、いかなる人が生産した情報も、他人の生産した情報を材料としているのである。情報の生産においても、生産者の個性の違いは、材料を必要とするか否かという点に現われるのではなく、材料となる情報の選択の仕方、およびそれに加工する技術にのみ、現われるのである。材料への加工技術が劣っていれば、生産物が粗悪になることも、情報の生産にかぎったことではない。下手な料理は、材料の栄養分も味もだいなしにするであろう。

最後に、教師が、彼の生産した情報に話すという形態や書くという形態などの特殊な組み合わせを与えること自体が、薬の調合、コーヒーや洋酒のブレンドなどと同様に、新しいものを生産することである。製品の質は、材料の配合の仕方によっても規定されるのである。

こうして、教師は「子供の頭に加工する」のではなく情報に加工するのであり、「生徒の精神を形づくる」のではなく、生徒が消費できる情報およびその表現形態を形づくるのである。生徒は、供給された情報を自分自身の労働によって消費し、自分自身のために新しい情報を生産する。だから、同じ教師が同じ情報を与えても、生徒たちは違った情報を生産し所有することになるのである。「生徒の精神を形づくる」のは、教師ではなく生徒自身である。また、「学校教師のサーヴィス」は、「その代りに……

労働能力自体をもたらず」(『剰余価値学説史』S. 130. 231頁)のではなく「労働能力を形成し,維持し,変化させる」(ibid., I の〔5〕に引用)のでもない。ある人の「労働能力」を生産することは,彼自身の仕事である。

〔3〕 医者「労働能力自体を保存する」か？

マルクスが「丸薬を処方する医者は生産的労働者ではないが,丸薬をまるめる薬剤師は生産的労働者である。」と言ったこと,すなわち「丸薬を処方する」ことを「生産的労働」として理解しなかったことは,情報を生産物としてとらえなかったことをよく示している。だから,マルクスは,医者が「サービス遂行それ自体」を売ると考えたのであり,したがって,医者は,その労働自体が患者によって消費されることをつうじて,「健康を維持し……労働能力自体を保存する」と考えたのである。

しかし,医者は,患者の病気の性質,およびそれを治療する方法についての情報を生産し,売るのである。医者の労働自体の「結果」はこの情報であって,患者が治ったということではない。マルクスは,この情報をとらえないで,医者の労働の「結果」は患者が健康を回復したことだと考えたために,「その結果は,その性質上,サービス遂行者によっては保証されない」(1の〔1〕に引用),「支払われるものは,サービス遂行それ自体で」(同上)ある,と考えたのである。しかし,医者が提供する病気の診断,薬の処方,生活方法の指示などの情報が優れたものであるかどうか,また情報を受けとった患者が治るか否かということは,これらの情報が医者の労働の生産物であり,彼の売る商品であるということ自体にはかかわりのないことである。それは,丸薬を飲んだ患者が治るか否かにかかわりなく,この丸薬が生産物であり商品であるのと同じことである。

患者が健康を回復することは,患者自身の仕事である。彼は,医者から提供された情報を材料として自分自身のために情報を生産し,その情報に

基づいて、寝つづける、ある種の薬を飲むなどの作業をする。この作業をしても彼の健康が回復しなかったとしたら、それは彼自身の生産した情報が粗悪であったか、または彼自身の労働能力が不足していたかの何れかのせいであろう。患者自身の生産する情報が優れているためには、その材料となっている医者の方が優れていると共に、それに加工する患者自身の労働が優れていなければならない。すなわち医者の診断と指示が優れていなければならないし、患者が医者を選ぶ方法、医者の指示を実行する方法も優れていなければならない。さらに、病気が治るという結果を生産するためには、それに適わしい労働能力が必要である。だから、そのような労働能力を日ごろから養成する必要があるのである。要するに、人が健康を回復することは、彼自身の労働の生産物であって、医者という他人の労働の生産物ではない。だから、ある人が病気から回復するということの責任は、医者ではなく患者自身に属するのである。

医者は、情報を生産するだけではなく、悪くなった胃袋や手足を切りとることもある。だから医者は、人の体を刻んで人の体を形づくるようにみえるかもしれない。しかし、医者が切り取るものは、人の体の一部分であったもの、すなわち人の体の異物であると判断されているものである。人の体にとっての異物となった部分を切りとることは人の体を分割することではないから、医者の手術の結果として患者の体は二つにはならないのである。それは、爪を切ること頭の髪を刈ることが、人の体を分割することではないのと同じことである。さらに、胃袋を切りとるかどうかを決定するのは、それを所有する患者自身であって、医者ではない。医者は、患者自身の決定に基づいて、患者の体にとっての異物であると患者自身がみなしたものを除去する。この点では、医者は、他人の頭髪を刈り、ひげをそる散髪屋とかわらない。医者の手術によって生産されるものは、爪切り、散髪、片づけ、掃除などの労働によって生産されるものに似た効果であって、この効果によって影響される他人の健康自体ではない。

また、医者が売るのは、手術という形態の労働ではなく、この労働によって生産される効果である。われわれは、病気であっても、手術されることを「ペストのように避ける」(ibid., S. 368. 593頁)であろう。そして、止むをえず手術されるばあいには、この労働自体はできるだけ少量であることをねがうであろう。しかし、労働の結果として体内から異物が除去されている状態を心からねがうであろう。

以上のように、医者は情報を生産し、また人の体から異物が除去された状態を生産するのであって、病人を回復させるという結果を直接に生産するのではなく、健康な人間を直接に生産するのではない。ある人の「健康」を「維持する」こと、すなわちある人の生存を維持することは、彼自身の仕事なのである。だから、医者は、「サーヴィス遂行それ自体」を売るのでなく、情報や異物が除去された状態などという生産物を売るのである。

〔4〕 どんな生産物も情報の表現形態という性格をもつ

これまでは、情報がそれ自体として商品となるばあいを見てきた。しかし、あらゆる生産物は、情報の実現形態としてとらえることができる。マルクス自身も、「労働過程の終りには、そのはじめにすでに労働者の表象のなかに存在し、したがってすでに観念的に存在していた結果が出てくるのである。」(『資本論』Bd. I, S. 186. (2) 66頁) と言っている。人間はこのことによって他の動物と区別されるというマルクスの見解が不合理なことは、別稿で明らかにしたい。それは別としても、彼は、この「表象」そのものが労働の生産物であり、商品になりうるものであるということを理解しなかった。この「表象」は、家の建築のばあいには「設計図」という形で生産されるが、いかなる物の生産も、設計という労働を含んでおり、いかなる生産物も、何かの形で設計された情報の実現形態である。

情報を生産する労働は、いわゆる設計図を作ることでは終るのではない。

情報の生産は、手足を動かす作業と不可分のものとして行なわれる。この点は、マルクスによって、次のような形で理解されている。

「単独の人間は、彼自身の頭脳の制御のもとでの彼自身の筋肉の活動なしでは、自然にたいして作用しえない。自然の組織において頭と手とが共に全体をなしているように、労働過程は頭の労働と手の労働とを合一する。のちには、それらは分離して敵対的対立にいたる。」(ibid., S. 533. (3) 335-336頁)

しかし、労働者たちのある集団全体の企画、決定、設計、指揮などの労働が、専門的な経営者の労働として独立するということは、その他の労働者が頭脳を使う必要はなくなったことを意味するのではなく、頭脳の使い方、生産されるべき情報が、分化したことを意味するのである。分業自体が、指揮と報告、伝票の作成と伝達、打ちあわせなどのような形で情報の生産と交流なしには行なわれえないだけでなく、個々のいかなる労働者の労働も、それ自体として、自分自身および他人のための情報の生産を含んでいるのである^(注) (長期間にわたって必要な情報であるか、一時的にのみ必要な情報であるかは別として)。

(注) 今井賢一氏は、この点について次のように言われる。

「たしかに自動車産業では、自動車というモノを作っている。しかし、トヨタや日産という会社に働いている多くの人々は、直接に自動車の部品をいじったり、自動車を組み立てているわけではない。彼らは、どういう自動車をどういうデザインで作ったらよいかを考え、部品をどのように発注し、できあがった車をいつどこに運ぶかという情報を作っているのである。つまり、会社で書類を作っているわけで、これは明らかに情報の生産である。」(今井賢一「見えないものの価格——情報の経済学序説——」『諸君』1969年10月号, 88頁。力点は原文)

ここには、いわゆる「物質的」なものの生産過程は情報の生産を含んでいることが、巧みに描かれている。しかし、「直接に自動車の部品をいじったり、自動車を組み立てている」人々もまた、管理者や共働者への報告、連絡などを、書類または口で行なわなければならないし、さらに、自分自身の作業のために

必要なさまざまな情報をたえず生産しているのである。

最後に、「物質的生産物」を生産する過程で生産され消費される情報の性質について、一言しておきたい。芸術的作品や学問的成果と他の生産物との境界は、もともとあいまいなものである。古代エジプトの人々が使った壺、バンド、寝台、古代ギリシヤの人々が集会のために使った建物、およびその柱に刻まれた彫像、さらに中世日本の武士が人を殺すために使った刀でさえ、われわれは芸術的作品とみなしている。このことは、現代の生産物についてもあてはまる。建物の設計が美術という性格を帯びることは否定できないであろう。美しさについての見解は別として、自分が住む家の美しさをねがわぬ人はいないであろう。茶わん、はし、スプーン、ナイフ、机、電気スタンドなど、日用品のどれ一つとっても、形と色との美しさが求められている。それだけではない。自動車、飛行機、また工作機械などのような機械でさえも、そうである。いかなる生産物も、美しさを求める人間によって需要され、また美的な情報を生産する能力を多かれ少なかれもっている人間によって生産されているのである。最後に、いかなる生産物も、学問によって生産された情報の実現形態という性格をもっていることは、言うまでもないであろう。

以上のように、マルクスが人間の生産として理解した情報の生産のためには「物質的生産物」が消費されるだけではなく、逆に「物質的生産物」の生産のためには情報生産物が消費されなければならないのである。そして、「物質的生産物」自体が、情報の実現形態または表現形態という性格をもっている。すなわち、「物質的生産物」自体が、物質と情報との統一物である。たんなる物質が人から人に譲渡されるようなことはありえないのである。

3. 空間的存在位置を生産する労働

〔1〕 マルクスは運輸業が「生産過程自体」を売ると考えた

マルクスは、『資本論』第2巻のための手稿で、運輸労働が「物質的な物」ではない「有用効果」を生産するという見解を述べている。このことから、マルクスは、運輸労働がそれ自体として「生産的」であると考えていた、という解釈が生じうる。しかし、マルクスが言っていることを全体的にみれば、このような解釈は誤っていることがわかるであろう。彼は次のように言っている。

「一般的定式においては、Pの生産物は、生産資本の諸要素とは区別される物質的な物とみなされる。すなわち、生産過程から分離された存在をもち、生産諸要素の使用形態とは区別される使用形態をもつ対象とみなされる。……しかし、生産過程の生産物が新しい対象的生产物ではなく、商品ではないような、独立の産業部門がある。そのうちで経済的に重要なものは交通業だけであるが、それは商品および人間のための本来の運輸業であることもあり、単に通知、手紙、電報などの運搬であることもある。」(『資本論』Bd. II, SS. 49-50. (5) 85頁。力点は引用者)

「その結果は——人が輸送されようと商品が輸送されようと——それらの変更された場所的存在である……。」(ibid., S. 50. 86頁)

「しかし、運輸業が売るものは移動〔Ortsveränderung〕自体である。産みだされる有用効果は、輸送過程すなわち運輸業の生産過程と不可分に結合されている。人と商品は、輸送手段と共に旅行する。そして、輸送手段の旅行、その場所的運動こそは、輸送手段によって引き起される生産過程なのである。その有用効果は生産過程の間に消費されうるだけである。それは、この過程とは区別される使用物、すなわちその生産の後ではじめて

取引物品として機能し商品として流通する使用物として存在するのではない。しかし、この有用効果の交換価値は、他のいかなる商品とも同じように、この有用効果に消費された生産要素（労働力と生産手段）の価値に、運輸業に雇われた労働者の剰余労働が創造した剰余価値を加えたものによって規定されている。この有用効果は、その消費にかんしても、他の諸商品とまったく同じである。それが個人的に消費されるならば、その価値は消費と共に消滅する。それが生産的に消費されて、それ自体が輸送中の商品の一生産段階であるならば、その価値は追加価値としてその商品自体に移される。したがって、運輸業についての定式は、 $G-W < \frac{A}{P_m} \dots P-G'$ となるであろう。ここでは、生産過程から分離されうる生産物ではなく、生産過程自体が支払われ消費されるのだからである。」(ibid., SS. 50—51.

(5) 86—87. 力点は引用者)

ここではまず、マルクスが、「生産過程の生産物が新たな対象的生产物ではなく商品ではないような独立の産業部門」である運輸業においても、「移動」という「有用効果」が生産され、「この有用効果の交換価値」は、他の商品と同じような仕方で規定されると言っていることが目をひく。しかも、このばあい、輸送されるものは商品であるか人間であるか、または「通知、手紙、電報など」のような情報であるかをとわないというのである。

しかし、マルクスは、ここで、「その結果は……それらの変更された場所的存在である」と言っているが、この「変更された場所的存在」ではなく、それを生産する過程、すなわち「移動自体」を、「産みだされる有用効果」として理解した。したがって、「運輸業が売るもの」は、「移動自体」、すなわち「生産過程から分離されうる生産物ではなく、生産過程自体」であり、「対象的生产物ではなく商品ではない」ということになる。また、「一般的定式」($G-W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'-G'$)の一環である商品資本 W' も「運輸業の定式」から除かれて、「運輸業についての定式は $G-W < \frac{A}{P_m}$

…P—G' となる」と言うことになる。このような見解は、「生産資本の諸要素とは区別されるもの」または「生産過程から分離される存在」は「物質的な物」であるという理解に基づいていることは、すでに(1の〔2〕で)述べたとおりである。

ところで、「生産過程自体が支払われ消費される」ということは、労働自体が支払われ消費されるということであろう。マルクスが、俳優、歌手、教師、医者などの労働については、「サービス遂行自体」が売られると言い、運輸労働については、「生産過程自体」が売られると言ったのは、前の労働は個人的労働であり生産物にも個性が現われているのにたいして、運輸労働は多くのばあい集団的労働であり生産物にも個性を認めがたいということ、また、動力として人間の筋力以外のものが用いられるか否かという違いなどがあったからであろう。

だから、マルクスはここでも、「サービス」という労働について述べたときと同じように、「生産過程から分離されうる生産物」は「物質的な物」であると考えたために、運輸労働が、「サービス」と同じように、この労働自身と区別されるものに転化することなく、それ自体として売られ消費されると考えた、と言うことができよう。また彼が、「生産過程自体が支払われ消費される」と考えることに基づいて、「運輸業が売[・]る[・]も[・]の[・]」は「商品ではない」と考えたのも、「サービス」について考えたことと同じであると言えよう。さらに、「対象的生产物ではなく商品ではない」ようなものの「価値」は、現実の価値ではなく名目的な価値であるということにならざるをえないが、このように推論されうる見解も、すでに「サービス」という労働についての見解という形ではっきりと述べられているのである。

運輸業においては、「生産過程から分離されうる生産物ではなく、生産過程自体が支払われ消費される」としたら、この「生産過程」が「生[・]きた[・]個人[・]の生活手段として」(『資本論』Bd. I, SS. 191-192. (5) 75-76頁)「消費さ

れる」か、「労働の生活手段として」(ibid., 同上頁) すなわち「物質的生産」のために「消費される」という違いは、この「生産過程」が直接に人間を生産するか人間とは区別されるものを生産するかという違いをもたらすことになるであろう。したがって、運輸労働は、それ自体として「生産的」であるのではなく、「物質的な物」を輸送するばあいにはのみ「生産的」であるということになろう。マルクスは、同じ『資本論』第2巻の第6章第3節「運輸費」で、運輸労働の生産的性格を説明しようとして、次のように述べている。

「……物の使用価値は、それらの消費においてのみ実現されるのであり、そして、それらの消費はそれらの移動を、したがって運輸業の追加的生産過程を必要とするかもしれない。それ故、運輸業に投ぜられた資本は、一部は運輸手段からの価値移転により、一部は運輸労働による価値追加によって、輸送される生産物に価値を追加する。……／＼各生産過程の内部で、労働対象の移動およびそれに必要な労働手段と労働力——たとえば梳棉室から紡績室に移される棉花や堅坑から地表にあげられる石炭——は大きな役割を演ずる。でき上った生産物ができ上った商品としてある独立の生産場所から空間的にへだたった他の生産場所に移転することは、同じ現象をもっと大規模に示しているだけである。ある生産場所から他の生産場所への生産物の輸送には、さらに生産部面から消費部面へのでき上った生産物の輸送がつづく。生産物がこの運動を完了するや否や、それはようやく消費のためにでき上ったのである。」(『資本論』Bd. II, S. 144. (5) 230頁)

ここでは、輸送過程自体が独立の生産過程として理解されておらず、輸送過程によって産みだされるものは「生産物」とは区別されている。そして、他の労働者によって生産された「生産物」を輸送することが「追加的・生産過程」としてとらえられている。また、運輸労働はそれ自体として（何を輸送するかにかかわらず）価値を生産するのではなく、他の労働の「生産物」を輸送するかぎりでのみ「輸送される生産物に価値を追加する」

と理解されている。

何らかのものを輸送すること自体が新しいものの生産なのではなく、「生産物」を輸送することが「追加的生産過程」なのであるという見解は、「人間」を輸送することは人間それ自体を直接に生産する過程の一部分だという見解と対応するものであろう。したがって、人間を輸送する労働は、人間を直接に生産する労働として理解された「サービス」と同種の労働ということになろう。実際に、『剰余価値学説史』では、そのような見解が述べられている。

「抽出産業、農業、工業のほかに、なお物質的生産の第四の領域が存在する……。移動産業がこれであり、それは人間を輸送するか商品を輸送するかをとわないのである。……ここではさらに、労働対象に物質的変化——空間的な移動がもたらされる。人間の輸送にかんしては、このことは、企業家によって彼らに与えられるサービスとしてのみ現われる。しかしこのサービスの買手と売手との関係は、糸の売手と買手との関係と同じように、生産的労働者の資本にたいする関係とは何のかかわりもない。——これに反して、商品にかんする過程を考察するならば、ここでは実際、労働過程において、労働対象すなわち商品について変化が生ずる。この労働対象の場所的定在が変えられ、それと共に、その使用価値に変化が生ずる。この使用価値の場所的定在が変えられるからである。その交換価値は、その使用価値のこの変化が労働を必要とする程度に応じて増大する。」（『剰余価値学説史』SS. 375-376. 603-604頁）

要するに、ここで、マルクスは、「人間の輸送」は「企業家によって彼らに与えられるサービスとしてのみ現われる」が、「これに反して」商品の輸送においてのみ、この「労働対象」の「使用価値に変化が生ずる」と共に「その交換価値が……増大する」と言っているのである。

以上で明らかのように、マルクスは、運輸労働が、「サービス」という労働と同じように、この労働自身と区別されるものに転化することな

く、それ自体として売られ消費されると考えた。すなわちマルクスは、運輸労働が、「サービス」労働と同じように、それ自体としては「不生産的」であると考えた。だから、彼は、「人間」を輸送する労働は「サービス」としてのみ現われるが、「生産物」を輸送する労働はこの「生産物」の「追加的生産過程」として現われると考えたのである。

〔2〕 空間上の存在位置自体が独立の生産物である

しかし、「生産物」の輸送だけを「追加的生産過程」としてとらえることは、「追加的生産過程」という見地からみても片手落ちである。買い物をする人を輸送することも「生産部面から消費部面へのでき上った生産物の輸送」である。米や本などの「消費部面」は、米屋や本屋ではなく、ほとんどのばあい家庭なのである。また、はんどう、絵具、釣竿などの「消費部面」は、山や海などであろう。手に何ももたない人でも、登山用の服、靴、帽子などを山で消費するであろう。だから、山や海へ行く人を輸送することは、「生産部面から、消費部面へのでき上った生産物の輸送」である。

もともと、マルクスが、「各生産過程の内部で、労働対象の移動……は大きな役割を演ずる」と言うだけで、人間の移動もまた各生産過程の内部で大きな役割を演ずることを言わないことが、片手落ちなのである。マルクスがこのことに気づかなかったのは、工場の中での労働者の移動は、多くのばあい労働者自身の歩行によって、つまり資本の支出を必要としないように見える労働によって行なわれたからであろう。

また、工場の中で労働者を運搬することが、マルクスによって「物質的生産物」と呼ばれるものを生産する労働の不可欠の部分であるだけではない。物を運搬する労働自体が、運搬する人自身を運搬する労働を含んでいるのである。例えば、トラックの運転手は、自分自身を運ぶことなしに

は荷物を運ぶことはできないであろう。

こうして、いかなる物の生産過程も、人間を運搬する労働を含んでいるのであるが、他方、人間を運搬する労働はすべて、人間とは区別される物を生産するために必要な労働とみなしうるのである。上に述べたように、買い物をする人を運搬することも、山や海へゆく人を運搬することも、「生産部面から消費部面へのでき上った生産物の輸送」であるが、それだけではない。はんどうと米との消費は飯の生産であり、絵具の消費は絵の生産であり、釣竿の消費は魚の生産である。だから、山や海へ行く人を輸送する労働は、山の絵、野草の実、谷川のほとりでたく飯、海の魚などを生産するために必要な労働の一部分であろう。これらの絵、野草の実、魚などは、商品として売られるばあいも売られないばあいもあるが、何れのばあいでも、これらのものは生産物であり、これらのものの生産には運輸労働が必要であることにはかわりがないであろう。なお、山や海で、絵、野草の実、魚などのような「物質的生産物」を生産しない人がいても、山の景色や人生についての情報や詩などを生産しない人はいないであろう（すでにみたように、マルクスは、情報を生産物としてとらえなかったのであるが）。

以上のように、人間を輸送することはすべて、人間とは区別されるものを生産する過程の一部分とみなすことができるのであるから、人間を輸送するか物を輸送するかという違いは、直接に人間を生産するか人間とは区別されるものを生産するかという違いを意味しないのである。人間を輸送することも物を輸送することも、人間を生産する過程としてとらえうるし、人間とは区別されるものを生産する過程としてもとらえうるのである。

さらに、いかなる生産物の消費も他のものの生産とみなしうるのだから、いかなるものの生産過程も他のものの生産過程の一部分とみなしうる。逆に言えば、ある生産過程が他のものの生産過程の一部分とみなされうると

いうことは、この生産過程自体が独立の生産過程であることを否定することにはならないのである。だから、人間であれ物であれ、何かを輸送することが、他のものの生産過程の一部とみなされうることは、輸送過程自体を独立の生産過程とみなすこと、その結果として生じた、輸送されたものの新しい空間的存在位置を独立の生産物とみなすことを妨げるものではない

こうして、輸送されるものが「商品」であるか「人間」であるか、または「通知、手紙、電報など」のような情報であるかということは、運輸労働の労働としての性質、および、この労働によって変えられた空間的存在位置自体の生産物としての性質には、何のかかわりもないのである。

〔3〕 歩くことも新しい空間的存在位置を生産する

運輸労働およびその生産物の性質は、何を運搬するかということによって変わるものではないだけでなく、何によって運搬するか、また誰が運搬するかということによっても変わるものではないであろう。例えば、人や米を、馬や自動車で運ぶかまたは人の肩にかついで運ぶか（旅人を肩にかついで運んだ大井川の渡しを思いだせばよい）という違いは、新しい空間的存在位置が生産されること自体を変えるものではなく、それを生産する労働の生産力を変えるだけである。

さらに、ある人が他人の運転するタクシーに乗るか、彼自身の運転する自動車に乗るかという違いも、彼が新しい存在位置を自分のものにする 것과自体を変えるものではないし、彼が自動車を使うか、足と靴だけを使うかという違いも、彼が生産するものの違いをもたらすわけではないであろう。つまり、人が歩くこと自体が、新しい空間的位置を、彼自身のために生産することである。

このように、人が歩くこと自体が、彼が手にもっている品物の運搬であり、彼自身という人間の運搬であり、また、彼がもっている情報の運搬で

ある。手紙の配達や電話局の作業だけが情報の運搬ではなく、人がしゃべりに行くことも情報の運搬である。また、工場の中で人が歩くことは、その工場での生産に必要な労働の一部分であるのと同様に、家の中で人が歩くことは、料理や掃除や育児などの労働の一部分である。そして、たんに歩くこと自体が、新しい空間的位置を歩行者のために生産しているのである。

このような見解は、「生産的労働」と「不生産的労働」との区別、つまり本来の「労働」とそうではないような行為との区別を解消するものであるという批判がもし生ずるならば、まさにそのとおりだと答えなければならないであろう。人の具体的な行為を、労働と労働ではないものとに区分するような共通の基準があるという見解こそが誤っているのである。人の行為には、他人の消費する物を生産する労働と、自分の消費する物を生産する労働との違いがあるだけであって、この違いが、労働と労働ではない行為との区別のように見えるのである。

あとがき：労働概念の難点と労働力商品論の 難点との関連について

すでに述べたように、マルクスの「生産的労働」「不生産的労働」の概念を分析するために不可欠である幾つかの課題は、別稿にまわさなければならなくなった。例えば、俳優、医者、教師などが、または彼らを雇う企業家が、いわゆる消費者に「サービス」という形態をもつ労働をそれ自体として売るという見解そのものに含まれる矛盾を明らかにすることは、一般に賃金労働者が資本家に労働自体を売る（または譲渡する）という見解を検討することとの関連において行なうことにしたい。また、マルクスは、商業労働が、「サービス」という労働と同様に「不生産的」と考えているが、その根拠を「サービス」労働とは別の点に求めているので、商業労働についての検討も別稿で行ないたい。

さらに、マルクスは、土地も、「サービス」と同様に「労働の生産物ではなく、したがってまた価値をもってはいない」(『資本論』Bd. III, S. 672.

(11) 20頁) が売られるものであると考えたが、この点の検討も別稿にゆずらざるをえない。

さて、マルクスが「不生産的労働」としてとりあげた労働は、俳優や医者などの「サービス」にせよ、召使の「サービス」にせよ、また商業労働にせよ、「資本」または「収入」によって「買われる」という点では同じであった。ところが、いかなる人も、家庭労働などの形態で自分の必要とするものを生産している。マルクスは、このような労働を「消費費用」という形でとらえ、「すべての人は、彼の生産的労働または生産的労働の搾取のほかに、生産的ではなく部分的に消費費用にはいりこむたくさんの機能を果たさなければならないであろう。(本来の生産的労働者はこの消費費用をじぶんで負担し、じぶんでじぶんの不生産的労働を行なわなければならない。)」(『剰余価値学説史』S. 261. 426-427頁) と言っている。続稿では、じぶん自身のための労働をこのように「消費費用」として規定することの難点を明らかにすると共に、この難点が労働力商品という概念の難点として現われていることを明らかにするよう試みたいと思うが、本稿で、情報も空間的存在位置も、人間とは区別された生産物であることを確認したことは、そのために役だつであろう。(なお、前稿「資本家の分解と利潤の分裂——資金の生産および資本家の諸機能の分化について。マルクスと宇野教授とへの批判——」〔桃山学院大学『経済学論集』第11巻第3号, 1969年12月〕の末尾に、「マルクスの剰余価値説を再検討すること」のための「一試論を続いて果したい」と述べたが、その前に本稿を書かなければならなくなったことをことわっておきたい。 1970年4月15日)